

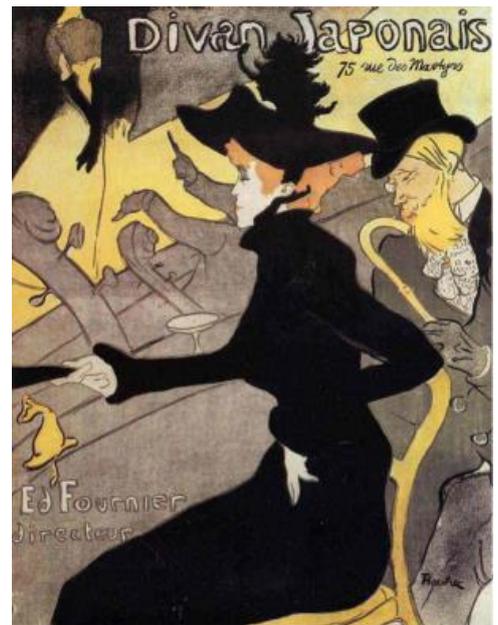
「舞い込んだ 1 枚の不思議な絵」

48 年卒 石田 泰和

皆様ご存じだと思いますが、母校のキャンパス内には「京都工芸繊維大学 美術工芸資料館」という施設があり、ここは内外に誇れる収集品 16000 点が保存・展示されていて、分野は絵画、彫刻、金工、漆工、陶磁器、繊維品、考古品等多岐にわたっています。その中でも特に世界的に貴重な 19 世紀から 20 世紀初頭にかけての近代ポスターを所蔵していることでも有名です。これらは本学の前身校の一つ京都高等工芸学校時代からの収集品で、明治大正を代表する応用化学者でもあり、明治 30 年京都理工科大学創設時初代学長を経て、35 年京都高等工芸学校の創立とともに初代校長となった中澤岩太、創設当時の教授である日本を代表する洋画家の浅井忠や、国会議事堂建設に携わった建築家、武田五一などが 1900 年（明治 33）にパリの万国博覧会視察のために渡欧し、その際浅井がパリで武田がドイツで収集したものを原点にその後収集や寄贈で増やしていったものです。

当時まだ日本の工芸品はヨーロッパで評価はされていたものの、日本のデザインはひな形に沿った伝統的な踏襲がほとんどで、ヨーロッパの新しい芸術・デザイン文化に触れた中澤は、日本の工芸界の将来の為にも、本格的なデザインの教育を行う学校を作ろうとし、これが我が国ではじめて本格的なデザイン教育が本校において開始されることになって現在の本学設立時の建学のルーツの一つになっています。

ホームページを閲覧すると詳細がわかりますが、中でも目玉的存在は、ロートレック《アンリ・ド・トゥールーズ=ロートレック（1864～1901）フランス印象派》の代表的なポスターである「ディヴァン・ジャポネ Divan Japonais 1892 年」（日本訳「日本の長椅子」日本とは関連もなく当時のフランスで起こったジャポニズムブームにあやかっただけの名前らしい）というポスターが、母校の HP の 3 番目ぐらいの画像に大きく出てきます。このポスターは世界的にも有名で所蔵美術館を調べてみても日本中、世界中でどんどん出てきます。京都工芸繊維大学美術工芸資料館、三菱一号館美術館、宮城県立美術館、島根県立石見美術館、徳島県立近代美術館、などが所有。海外ではボストン美術館、チェコ国立プラハ工芸美術、オルセー美術館、モンマルトル美術館、アルビ、トゥールーズ=ロートレック美術館などが所有



ところで前置きは長くなりましたがここからが投稿エッセイです。趣味で絵を集め出して 10 年ほどになりますが、それもこの広い分野で近代西洋画を中心に……。絵のコレクターはその買い方もピンキリで上は画商が訪ねてくるあるいは信用あるデパートで買うことで贋作をつかまされないよう金に糸目をつけないリッチな階層の買い方、ところが当方に至っては一応小さな会社を営んではいますが、所詮サラリーマンの世界の話、1 枚の絵にかけられる小遣いはお察しの通り大卒の初任給の半分もかければ清水の舞台から飛び降りる覚悟が必要です。そんな境遇の中、たまたま近所に趣味でプロの骨董市に出入りする方がおられ、これまでに何枚かの絵を落札していただきましたが、その方よりかねてか

ら念願であったピカソ（リトグラフ）がオークションに出るとの情報を得て入札をお願いしました。もちろんそこは今流行のネットオークションとは違い、古物商などの免許を有したプロの集まる一種のシンジケートのような組織で、ここで仕入れた古物商がそれぞれの顧客に売り出すといった仕入れの原点で、まず贋作・偽物はない、もし出せば出入り禁止の処分が待っているという厳しい世界らしいです。そのため素人は参加できません。出品予定品も写メールを見せていただき、気に入った物であれば電話で最低価格をお願いして落札していただくといった、プロ集団専用のオークション会場となっています。オークションが始まりすぐに電話があり「ピカソが予定通り出品されるようだが、抱き合わせでもう一枚水彩画がついてくるけどどうする？」と連絡が来ました。本命はピカソでしたので二つ返事でOKしましたところ、一応予定価格内で落札できたと連絡が入り、早速会場に絵を引き取りに行くと抱き合わせの水彩画を見てびっくり、これがなんと見覚えのあるあのロートレックの有名なポスターDivan Japonais（日本の長椅子）の原画らしき肉筆画がついてきました。その後ネットで母校を始め各地の有名美術館にあるポスター所蔵品の写真と比較してみると縦横の比率とか構図にかなりの違いがあり、果たしてこれはいったい誰が何の目的で描いたものか謎は深まるばかりでした。



大きな違いは、①ポスター（以下ポス）にある上方の2行目の文字が水彩にはない。②右下にサインらしきものが水彩にはない。③女性の顔立ち、男性の鼻筋の描き方が水彩がラフでポスは人物全体丁寧な仕上げがされている。④ポスは女子の右手で引張っている部分、長椅子の飾りの先の左、腕の上部分が塗りつぶされている。これも製版の枚数制限で同一版の色種に変えられたものか？⑥最も何よりも大きな違いが縦横比の違いで水彩の横が長い構図でポスは明らかに2cm程右がカットしてある。タイトル文字がポスはあまりに右に寄りすぎて逆に不自然で水彩を見るまでわからなかったが極めて自然に位置している。印刷紙サイズの制限により製版する際左下の文字を

割愛できないため、右部分をカットしたと考えられる。⑦全体に水彩が描写が大ざっぱでポスは丁寧に描かれている点から、水彩が下書きとみるにふさわしい。以上これらを鑑みると水彩が先に書かれ、ポスが後から作られたとみるのが自然ではないか、逆にポスを模写したのであれば構図上右端だけ付け足すといった描き方はしない。など素人判断をしていますが、後は紙の年代測定やロートレックの専門家によるタッチの判断などプロにゆだねなければ結論は出ないと思います。もしかするとラッキーなことに本物の原画かもしれません。そうなれば歴史的発見となるかも？などと夢は膨らむばかりで今日まで、来客にもほとんど注目されることもなく静かに事務所ロビーの片隅を飾っています。

リトグラフ：制作者の肉筆ではなく限定数をシルクスクリーンや、石版で造る制作数限定の複製画